



本棚

古文の「北山の垣間見」の授業の時に、源氏物語で女子が走っている場面はここしかないという話をした。漢文の「項王最期」の授業の時には、項王が「笑」の場面はここしかないという話をした。ともに興味深いトリビアであるが、同時に、単にトリビアとして済ませてはしまえない、大切な鑑賞のポイントにもなっていた。

こういう知識は専門的な研究書の中に書かれているのだろうと思っている人も多いかも知れないが、実は前者は「週刊 絵巻で楽しむ源氏物語五十四帖」（週刊朝日百科、2012）の中に出て来る指摘であり、後者は有名な武田泰淳『司馬遷～史記の世界～』（講談社文庫、1972）に出てくる指摘である。

*

この前、S 一郎先生から「25Rの本棚に昔の面影はありませんね～」と言われた。実は私は過去2回S 一郎先生と担任を一緒にやって仲良し（笑）なのであるが、その前の担任の時に、25Rの教室には「ほとちゃん文庫」というものが存在したのである。

当時は校舎が改修中だったため、今の校庭にプレハブの仮校舎を立ててそこで授業をしていた。プレハブで、あまりに文化的な香りがしない？ものだから、せめて教室くらい文化的にしようと思い、余っていた本棚を教室の後ろに運んできて、そこに私が読んで面白いと思った本や授業で紹介した本などを、文庫本・新書を中心に並べておいたのである。いってみれば、私の知的レベル（のちょっと下？）くらいを本棚で表現することによって、生徒諸君の（「拡散的好奇心」ではなく）「知的好奇心」を刺激しようと試みたわけである。

ところが、私の知的レベルについてこられる諸君は極めて少数で（笑）、むしろ先生方がその本棚を覗いては、授業の話題にしてくださっていた。それがS 一郎先生であり、今年25Rは担当していただけなかったが、倫理のF 田先生だったりしたわけである。S 一郎先生はそれを覚えていらっしゃるの、牛乳パックと漫画（…とはいっても、「あさきゆめみし」も入っているらしいが）しか入っていない現在の25Rの棚を見て、前記の発言となったわけである。

その棚には、私の好きなジョン・アーヴィングや町田康の小説をはじめ、「あさきゆめみし」や「まる、ん」なども入れておいたし、ベトナム戦争の写真集や、冒頭に記したような古典の授業の際に参考にした図版や文庫・新書、進化論や情報などに関する理系の書籍なども入れておいたのだが、メインとなったのは、現代文の教科書の出典となるような社会学系の書籍であった。というのも、社会学は、私たちが当たり前だと思って暮らしている社会の現状を新しい視点から解明する学問だから、私たちが当たり前だと思っていることを、筆者独自の視点から解剖する評論（「もちろん～、しかし…」的発想で「…」の部分に筆者独自の主張がある）を多く載せる現代文の教科書は、社会学の教科書といってもイイような状態になっているからである（「ファンタジー～」では、観光旅行が新たな視点から分析されていた…）。

ということで、本棚を見つけて「ほとちゃん文庫」を再開してもイイかなと思っているところである。